

大学の図書館 第41巻第5号 (No.582) 2022 5



目次

全国大会、準備中です 山口友里子 ... 53

特集：学習指導要領改訂と「高大連携」

 高大連携に取り組む大学図書館が考えるべきこと 蒲生 英博 ... 54

 学び取る活動を支える学校図書館 一村 美穂 ... 57

 大学、そしてその先へつなげる 鳴川 浩子 ... 59

 関西学院大学の高大連携 尾木 紹学 ... 62

 大学図書館の可能性を切り拓く ―高大接続の学びを支援する― 林 恵理 ... 66

 「図書館入試」におけるお茶大図書館の挑戦 餌取 直子 ... 70

全国大会、準備中です

山口 友里子

今年も全国大会はオンライン開催です。日程は9月17日(土)から19日(月・祝)の3日間。現在実行委員・全国委員のみなさんと水面下で準備中です。

ということで、改めまして、第53回全国大会実行委員長の子です。今回の巻頭言、実行委員会を代表してご挨拶に参りました。どうぞよろしくお願いいたします。

オンラインになってから、あるいはそもそも参加したことないんだけど、どういう雰囲気なの？という方、昨年10月号、12月号に当日の雰囲気そのままのレポートが掲載されていますのでそちらをお読みいただくと参考になるかと思えます。私個人の感想を付け加えるとすれば、いま現場で話題になっていることや抱えている課題の情報交換ができることはもちろん、大学図書館あるいは図書館職員/司書に求められる役割や立ち位置など、目の前の業務から少し先を考えるためのヒントを得る場でもあるなあと

感じた昨年大会でした。

新しい知識を得るインプットだけでなく、実践や研究発表のアウトプットの場として、またオンラインでは少々難しい面もありますが、交流の場としてうまいこと使っただけなら大変うれしく思います。

全国大会の情報は、次号6月号やウェブサイト (https://www.daitoken.com/research/annual_conference/2022/)、Twitter (@dtk_taikai) にて順次公開していきますので、とりあえずお手元のスケジュールに「9/17-19 全国大会」とご記入いただくとよろしいのではないのでしょうか。ぜひお願いします。

また、大会に向けて、あるいは当日の運営のお手伝いをしてくださる方を随時募集中です。手伝っても良いよ！という方がいらっしゃいましたら、実行委員会 (taikai@daitoken.com) までご連絡ください。お待ちしております。

(やまぐち・ゆりこ/

第53回全国大会実行委員長)

特集：学習指導要領改訂と「高大連携」

2018年3月に公示された高等学校の学習指導要領の改訂が、移行期間を経て2022年4月より実施となりました。今改訂の基本的な考え方に「高大接続改革という、高等学校教育を含む初等中等教育改革と、大学教育改革、そして両者をつなぐ大学入学者選抜改革の一体的改革の中で実施される改訂」と明記されている通り、大学にも多方面で大きく影響することが想定されます。

本特集では新学習指導要領のもと、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業」「総合的な探究の時間」を経験した生徒、言い換えますと従来の知識伝達型学習から「探究」学習を経験した生徒が2023年度以降順次入学してくることを見据えて、総論として1名、学校図書館の事例として2名、大学での高大連携事例として3名の方にご寄稿頂きました。

変化が激しく、複雑性が増し、確実な将来予測が困難な時代に、学生一人一人が卒業までの学びの中で、知識だけでなく生きていくために必要な様々な力を一つでも多く涵養できるように、司書・図書館職員を含む大学職員がどのように関与・貢献できるかを考える機会となれば幸いです。

(編集担当：東京地域グループ)

高大連携に取り組む大学図書館が考えるべきこと

蒲生 英博

はじめに

労働法学の開拓者として知られる末弘巖太郎(すえひろ いずたろう 1888-1951)は、1937年、東京帝国大学法学部の新入生に対して、次のように述べています¹⁾。

「大学の講義は、法律の理論的解説が主な内容なので、学生は、法学とは法典の意味を説明するものと軽く考えて、(旧制)中学以来の暗記物の学科と同じ気持ちで学習する。しかし、法学教育の目的は、『法律的に物事を考える力』のある人間を作ることである。この『力』を養うためには、いたずらに多くの本を読んで学説の異同を知るだけでは役に立たず、学説の相違の理由にまで遡って各学者の考え方を研究しなければならない」(要約)

戦後の日本では、その時代や社会で求められる能力やスキルを身につけるために、詰め込み教育、ゆとり教育、脱ゆとり教育などの教育改革が進められてきました。2018年に告示された「高等学校学習指導要領²⁾」は、2022年度から年次進行で実施されますが、この要領には「主体的・対話的で深い学び」という表現が14回も繰り返し使われています。

末弘の指摘から80年の時を経て、漸くここまで来たのか、という思いがあります。

大学図書館は、大学の教育研究活動全般を支える学術情報基盤の一つですので、「高等学校学習指導要領」の改訂内容は、学習支援を行う際に考慮する必要があります。

今回の改訂で重視されている「主体的・対話的で深い学び」は、「アクティブ・ラーニング」の視点に立った授業改善を行うものですが、2000年代半ばから、各地の大学図書館が開設してきた「ラーニング・コモンズ」は、

まさに「アクティブ・ラーニング」を進めるための学習環境ですので、大学図書館にとっては得意とする分野です。

さて、本稿は、高大連携に取り組もうとする大学図書館が、立案や実施に際して、どのように考えれば良いのかを述べたものですが、すでに論考など³⁾がありますので、ここでは要点を述べます。

1. 高大連携とは何か

高大連携とは、高校と大学が、それぞれの教育資源を活用しつつ、連携協力して行う教育活動の総体⁴⁾です。高校生が大学に行って講義を受け、逆に、大学の教員が高校に出掛けて講義や講演を行うことや、体験入学、オープンキャンパスへの参加などです。

高大連携が議論され始めたのは1980年代です。高等教育改革として、大学入学者選抜制度の改革、大学入学資格の自由化・弾力化、特に能力の伸長の著しい生徒への大学レベルの教育研究機会の提供などの議論を経て、高大連携が全国的に広がる契機となった1998年の大学審議会⁵⁾、1999年の中教審⁶⁾の答申へと繋がっていきます。

これらの答申では、「自ら学び、自ら考える力」、「課題探求能力」の育成、そして高校と大学の教育上の連携を拡大することが重要であると提言しています。

2. 大学図書館による高大連携の進め方

1980年代から始まったオープンキャンパスで、大学図書館は受験生に対して、図書館ツアー、企画展示などを実施してきました。

図書館ツアーも重要な高大連携ですが、よりディープな高大連携を進めるためには、先ず、図書館が所属している大学が、附属の高校、近隣の高校などと高大連携協定を締結しているかどうかを確認します。協定があった方が、高大連携事業に取り組みやすいです。

名古屋経済大学（名経大）では、協定の覚

書で、高校での総合学習の実施における図書館、情報センターなど大学施設の利用を協議のうえ実施していく、と書かれていて、図書館が高大連携を進めやすくなっています。その上で、具体的な連携内容を協議する場を設けることが重要です。大学図書館と、高校の担当者（司書、教諭、生徒など）が協議することで、連携内容が明確になってきます。

協議の場を設け、高校が大学図書館に何を求めているかを理解し、可能な限り応えていくことで、大学図書館の役割を果たすことができます。

また、高大連携協定は特定の高校との協定ですが、高大連携事業は、オープンキャンパスのように、協定外の高校生も対象として実施されることがあります。他にも、例えば、夏休み期間などの図書館開放、図書館業務のインターンシップなどがあります。これらの場合は、大学当局の承認が必要ですが、連携内容によっては大学当局からの要請による場合もあります。

高大連携の概略をつかんでいただくために、名経大図書館がこれまで実施してきた連携事業のいくつかを簡単にご紹介します。

- ・大学の正規科目としての高大連携科目
名経大への入学が内定した高校生に対する90分の講義の内、1コマ「図書館を知るテクニック はじめの一步」を担当し、OPACを使った資料検索実習などを行いました。
- ・大学入学前の課題図書
高校からの要請により、大学教員が選んだ本を入学前に読み、考えたことをまとめ、入学後の最初のゼミの時間に提出するという課題です。図書館は、その課題図書を整備・展示して高校生に案内します。
- ・展示実習
高校生が展示テーマに沿った本を図書館の蔵書から選び、POP広告(Point of purchase advertising)を作成し、展示します。
- ・ビブリオトーク（ビブリオバトルよりゆる

いルール)

テーマに沿った本を高校生を選び、POP用(紹介する時のメモ代わりになる)シートを作成します。一人3分で選んだ本を紹介し、高校生同士で質疑応答を行い、チャンプ本を選びます。

- ・クイズ形式のレファレンス課題
OPAC、県内横断検索システム、記事データベースなどを使い、図書館が用意した課題に高校生が解答します。
- ・図書館業務のインターンシップ
高大連携協定外の高校から、2名の高校生を3日間受け入れ、発注・受入、整理、閲覧などの職業体験を行いました。
- ・学校図書館の研究会への講師派遣
地区の学校図書館研究会高校部会から、会場使用と、研究会での講師依頼があり、図書館長と図書館職員が講師となりました。
- ・高校生による美術展・写真展
高校美術部の展示会、高校生による写真展「震災で消えた小さな命展」、美術科講師による油絵展などを名経大図書館のエントランスホールで開催しました。
- ・高校生への図書館利用カード発行
高大連携協定を結んでいる高校の生徒は、利用申請すれば、在籍する年度末まで有効な図書館利用カードが発行されます。5冊、2週間、図書を借りることができます。

おわりに

大学図書館は、設置者、地理的条件、分野、規模など多様です。名経大図書館は、専任職員4名(正規職員2名、非正規職員2名)の小さな図書館で、系列高校は2校ありますが、高大連携でさまざまな取り組みを共に行っているのは、主に近隣の県立高校です。名経大に入学される高校生ばかりではありませんが、大学への進学後、円滑な大学生活を送るために、大学図書館として少しでも貢献したいという思いが、重要なモチベーションと

なっています。

高大連携は、大学図書館が大学生の学習の場所としてだけでなく、高校生の「主体的・対話的で深い学び」にも適した場所であることを示すことができ、大学図書館の存在意義を明らかにできる、発展性のある面白い事業です。

参考文献と注記

- 1) 「新に法学部に入学された諸君へ」の初出は、『法律時報』1937, 9巻4号, p.16-18ですが、『役人学三則／末弘巖太郎著；佐高信編』(岩波現代文庫, 2000), に収録されています。
- 2) 文部科学省, “高等学校学習指導要領(平成30年告示)”, 2019.
https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf (参照 2022-03-23)
- 3) 高大連携と大学図書館を包括的に捉えた論文は次の2編があります。前者は大学図書館、後者は高校生の視点からの論文です。蒲生英博ほか, 高大連携における大学図書館の役割, 大学図書館研究, 2020, 116号, p.2071 1-14.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jcul/116/0/116_2071/_pdf/-char/ja(参照 2022-03-23)
小野永貴, 高校生の学習情報資源の利用実態を通じた図書館の高大連携の役割に関する研究, 筑波大学, 2021, 博士論文.
<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/record/2002082/files/DB03011.pdf> (参照 2022-03-23)
また、高大連携関連情報をまとめたウェブサイトとしては次のものがあります。
名古屋経済大学図書館, “高大連携と大学図書館”,
<http://wwwopac.nagoya-ku.ac.jp/link/koudai.html> (参照 2022-03-23)
- 4) 勝野頼彦, 高大連携とは何か：高校教育

から見た現状・課題・展望. 学事出版, 2004, 190p.

- 5) 大学審議会. “21世紀の大学像と今後の改革方策について競争的環境の中で個性が輝く大学(答申)”. 文部科学省. 1998.
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315932.htm (参照 2022-03-23)
- 6) 中央教育審議会. “初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)”. 文部科学省. 1999.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuouu/toushin/991201.htm (参照 2022-03-23)

(がもう・ひでひろ／

名古屋経済大学図書館)

学び取る活動を支える学校図書館

一村 美穂

2021年度までの本校の「総合的な探究の時間」では、1年次に「科学と文化」と名付けた探究学習の授業、3年次に「科学と未来」と名付けたゼミ形式の授業を実施した。

1年次「科学と文化」

「科学と文化」は生徒自身が設定した問いについて、個人、またはグループで探究することが中心となる。研究力・研究する意識を育てること、問題を発見し、仮説を立て、検証し、解決できる力を身につけること、情報活用能力・分析力・プレゼンテーション能力を身につけることを目指す。ここでは、2020年度の「科学と文化」の取り組みを紹介する。この授業は学年の生徒全員が参加するが、同一時間に複数のクラスが被らないように時間割が組まれている。各クラス2名の担当教員

に加え、情報科教員と司書が指導にあたる。

6月までは、探究活動の準備段階としてオリエンテーションや模擬研究を行う。新型コロナウイルス感染拡大防止のための臨時一斉休校により、4月・5月にはオンラインで授業動画や課題を配信した。まず、年間の流れ、探究についての説明、過去の優秀作の紹介などを動画で行った。司書からは、探究とはどういうものなのか、調べ学習との違いやプロセスを説明した。図書館は探究のような「学び取る」活動を支える場であることも伝えた。次に、身近な疑問を見つけ、そこから問いに発展させる課題を出し、問いづくりの練習をさせた。登校再開の6月には、模擬研究として紙コプター（T字型の形の紙を高いところから落とすと、回転しながら落下する）の実験を行わせた。仮説と実験計画を立て、十分なエビデンスから結論を導き出すという過程を通して、探究の進め方や考え方を理解することが目的である。紙コプターの羽の長さや太さなどを変え、「滞空時間が長くなる条件は何か」という問いに答えることを課題とし、実験後はクラス内で発表、レポートの相互評価をさせた。

7月からはよいよ探究活動を始める。はじめに司書より、調べ方、参考文献の書き方の説明、思考ツールの紹介をした。調べ方については、書籍・雑誌・新聞・論文・データベースなど様々なメディアの特性や情報収集のポイントを伝えた。参考文献の書き方については、出典を明記する重要性や書誌事項の確認方法、参考文献リストの作り方を教えた。思考ツールについては、KJ法、マンドラート、マッピングなど発想するのに活用できるツールを紹介した。自分の興味関心がどこにあるのか、それについての知識・情報をどのくらい知っているのか、確認するために役立つと考えた。

各自の問いを決め、情報収集を行う段階では、特に図書館が活用された。図書館にはク

ロームブック20台を常置しているため、生徒は図書館資料とインターネットどちらも用いながら情報収集していた。司書は生徒の求める情報に応じて資料の収集・提供やレファレンスを行った。なお、活動記録シートに計画や毎時間の活動内容を記入させ、担当教員はこれを適宜確認し、進捗状況に応じて助言を行った。

11月の中間発表が近づくと、アンケート調査や実験を行う生徒が増えてくる。問いと合う調査・実験になっているか確認する意味も込め、内容整理のワークシートを配布した。問いと仮説、そして問いに答える（仮説を検証する）ためにどのような情報、調査・実験が必要か記入するもので、これをもとに中間発表のポスターを作成させた。中間発表は、クラス混合で複数会場に分かれ、ポスターを見せながら発表する形式とし、相互評価や教員からの講評も行った。1月の最終発表もほぼ同じ形式であったが、ポスターではなくスライドを用いることとし、研究集録としてまとめるためのレポートも作成させた。スライド作成の注意点やポイント、そしてレポートの書き方について、司書が資料を作成し配布した。

試行錯誤しつつ一通りの活動を終えたが、問いが絞り切れていない、情報収集が不十分である、調査・実験の精度が低い、考察が論理的でないなど、課題も多かった。そもそも、生徒自身で問いを設定し自由に探究するのは非常に難易度が高く、基礎となるスキルを十分に習得した後に実践できることである。オリエンテーションや模擬研究だけではその習得は不十分であり、再考の必要がある。

3年次「科学と未来」

「科学と未来」は教員が提示したいいくつかの講座から一つを選択し、ゼミ形式で発表や議論を行う。ここでは、2021年度に国語科教員が開講した「実践国語」について紹介す

る。この授業は、教員が設定したテーマについて、生徒は関連本を読み、調べた上で、ディベートを行い、最後に小論文を執筆するという流れで行われた。テーマは、日本における原子力発電の運用継続の是非、グローバリゼーションの是非など。調べる方法やスキルを身につけることよりも、信頼できる情報にたくさん触れ、多面的に考えることや、論理的な考えを表現することに重点をおいた授業であったため、司書はテーマに沿ったブックリストや、関連する分類番号・キーワードを記載したパスファインダーを作成するなど、生徒がスムーズに調べられるよう支援した。授業内はもちろん、授業外でも資料収集のために生徒が来館した。受講する生徒が約30名だったこともあり、司書が個別にレファレンスに対応することができた。

ディベートでは、肯定側・否定側それぞれ3名でチームを組み、4組の対戦が行われた。それぞれにジャッジがつき、議論の流れの記録、勝敗の決定を担当する。複数の論点で話せるか、主張する内容の根拠となる情報を示せるかといった点がポイントとなった。特に、グローバリゼーションの是非など、環境・経済・文化・政治といった様々な要素が複雑に絡み合うテーマでは、立論で示した切り口から発展し、つながり影響しあう他の側面について指摘できたかどうかで、議論の深まりに差が出たようだ。また、発言量が多く受け答えがスムーズでも、データや裏付けが不十分なため負けであるとジャッジが判断するなど、論理的思考を実践できていると感じられた場面もあった。

調べ、議論した内容をふまえて各自が執筆した小論文では、具体例や根拠を示しながら論じられたようだ。ただ、例えば原子力発電をテーマとした際は、小論文を見据え、科学倫理や科学コミュニケーションなどについての書籍をブックリストに入れるなどしたが、それらを読んだり、そのような広い概念まで

考慮したりできた生徒は少なかった。

全体として、多面的・論理的に考える力を鍛えることは達成できたように感じる。授業後のアンケートによると、様々な情報や知識を知らなければ、深く考えて自分の意見を確立することはできないのだと実感できたようだ。新聞やニュースで扱われる問題に意識が向くようになった、深く考えるようになったという自身の変化を感じた生徒も多かった。

新たな探究プログラム

1年次「科学と文化」では基礎となるスキルの習得が不十分であったこと、そして、3年次「科学と未来」との有機的な繋がりが無いことから、2022年度入学生以降の「総合的な探究の時間」は1年次と2年次を通して行う探究プログラムへ変更する予定である。1年次では、探究の基礎となるスキルを習得するための研修を、2年次では生徒自身で問いを設定し探究する活動を行う。1年次の研修では、正確な情報を収集・整理し活用すること、自身の意見を根拠とともに論理的に主張することなどを学ぶ「情報リテラシー研修」、研究の進め方や考え方を学ぶ「模擬実験研修」、データを処理・分析する方法を学ぶ「データ分析研修」、自身の興味関心や進路を考える「キャリア研修」などを実施予定である。2年次の探究活動は、生徒の興味関心に応じていくつかの分野を設定し、その分野の中でグループを作って活動する形を考えている。模擬研究やディベートなど、これまでの「科学と文化」、「科学と未来」の内容も活かしながら、より基礎を固め、体系的に学べるよう工夫した。この新たなプログラムを企画・運営するチームに司書も参加しており、引き続き生徒の活動を支援していく。

(いちむら・みほ／

神奈川県立柏陽高等学校図書館)

大学、そしてその先へつなげる

鳴川 浩子

1. 玉川聖学院情報センターについて

本校は自由が丘にある中高一貫の女子のミッションスクールである。高等部からの新入生も多い。

図書館は2000年の校舎建て替え時にPC室とほぼ同じ環境を整えた「情報センター」として新たに生まれ変わった。筆者は開館から1年後に着任し、現在、専任・専門・正規の司書教諭として勤務している。2021年度からは新学習指導要領で新たに設けられた中等部「総合」の中3学年を、他3名の教諭とチームで担当している。

図書館はHR教室棟の1階、下足室に近いところに設置されている。蔵書は約45,000冊。生徒に貸し出すデスクトップ型PC、Surface、iPad、無線対応のプリンタなどを管理しており、wifiも完備され、教室と同じように授業ができる環境が整っている。学内で使用するデータベースの管理も図書館でおこなっており、2020年度夏からは電子図書館も導入した。授業での利用も多く、専任・専門・正規の司書教諭2名で運営している。

2. 誰にとっても気軽な場を目指して

図書館＝一部の読書好きの訪れる場所であり、静かな場所という時代もあったが、学校図書館は誰もが当然のように利用する場であると考えていたので、着任当初から、生徒たちにとって気軽に訪れることができる場とすることを目指した。開館中は扉を開け放し、静かに勉強するエリア以外では自由に会話ができ、生徒の好む書籍を購入し、リクエストも積極的に受け入れ、ボードを中心とするゲームを置く、などの工夫を重ねてきた。

今では、誰でも気軽に利用できる場所となっている。

3. 生徒の「学び」の支援

開館以前から図書館を使った授業はあったが、司書教諭が授業者と連携して授業に関わるのはごく一部の教科にとどまっていた。そこで「図書館を使う」＝「司書（教諭）を使う」であることを知ってもらえるように働きかけてきた。図書館を利用する授業が入る際には、授業内容を聞き、内容によってはこちらから提案をすることを繰り返し、現在は複数の教科と連携した関わりが持てている。

その際に、常に意識していることは、図書館を利用することは、生涯における図書館利用につながる、ということである。中高6年間もしくは高等部3年間の図書館利用は、短期的には中高それぞれの学び、中期的には進学先での学び、長期的には生涯の学びにつながることを意識している。特にICT環境の整った図書館なので、情報リテラシー教育、デジタル・シティズンシップ教育は図書館の担うべき重要な学びだと考えている。

3. 授業での図書館利用の状況

昨年度は中等部で総合学習が始まった影響もあって、前年から170時間も増えて、491時間の授業での利用があった。内訳は【表1】【表2】に示した通りである。

利用が重なってしまった場合には、使う資料が限定されていない授業を優先し、資料が限定されている授業は教室に司書教諭が出張する、資料のみを貸し出すなどして対応している。

学年	授業	出張	資料	部屋	合計
中1	82	18	13	3	116
中2	92	0	20	1	113
中3	81	6	23	1	111
合計	255	24	56	5	340

【表1：授業での図書館利用状況（中等部）】

（授業：情報センターで授業を実施 出張：司書教諭が教室に向く 資料：資料のみ貸し出す 部屋：場所としてのみの利用）

数学以外の全科目での利用があり、教科教諭と司書教諭とで協働して授業をおこなう、資料のみを集めて個別レファレンスで対応するなど利用内容はさまざまである。図書館予約時に授業の内容を聞き取り、どのように関わるかを都度相談している。

また授業で使うわけではないが、取り上げる単元の内容に関わるコーナーを作って、興味関心を深められるようにするなどといったこともおこない、生徒の学びと図書館が常につながっているように心掛けている。

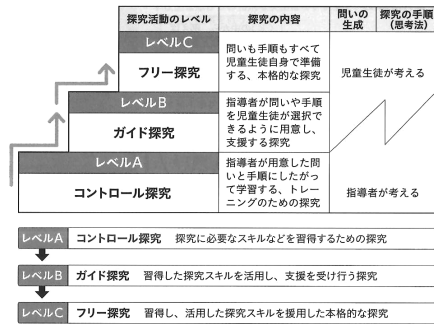
4. 中等部での探究の授業の実際

中等部で探究の授業が本格的に始まるのは中2からであり、ゴールは中3で取り組む修了論文である。2021年度から始まった総合学習、通称「探究」では、中2は「環境学習」と「情報」をテーマに取り組む。前期は環境問題について、3つのクラスが川の上流域、中流域、下流域に分かれて、ゴミ拾いや現場の方にお話を聞くなどの体験と調べ学習を通してグループで学び、学院祭で発表する。後期には2008年から取り組んできた中2家庭科総合での「探究しよう！」という単元で、グループでテーマ設定の過程を可視化し、テーマについて探究し、発表する。そして中3で個人の探究活動として「修了論文」に取り組む。

【図1】に示されるような探究活動の流れが、中等部総合学習が始まったことで非常に良い形で整理された。ある程度教師が示した

学年	授業	出張	資料	部屋	合計
高1	27	0	13	0	40
高2	52	0	7	1	60
高3	43	2	2	4	51
合計	122	2	22	5	151

【表2：授業での図書館利用状況（高等部）】



【図1：探究活動のレベル】

出典：桑田てるみ (2016)『思考を深める探究学習：アクティブ・ラーニングの視点で活用する学校図書館』全国学校図書館協議会 p24

問いに沿ってのレベルAの活動が環境学習でなされ、家庭科の「探究しよっ!」で教科が示すゆるやかなテーマから自分たちで問いを立てるレベルBに取り組み、そして個人で取り組む中3修了論文ではレベルCのフリー探究に取り組む。

このいずれにも図書館は関わり、資料を提供し、レファレンスに対応するだけでなく、本校オリジナルの『道しるべ 論文作成の手引き』を作成し、情報リテラシー、著作権、参考文献の書き方、情報カードやマッピングの利用を指導している。

5. 高等部での探究の授業の実際と課題

高等部では現代文と本校オリジナルの総合学習「人間学」での「チーム探究」について紹介する。

高1～3の現代文では「新聞ノート」という課題が年に数回課される。新聞を読み、要約と意見を書くもので、1つの新聞から意見を書くAパターンと、2つの新聞を読み意見を書くBパターンとがある。最初の授業で購読している全国紙5紙と東京新聞、所蔵している『切抜き速報』(ニホン・ミック)や「スクールヨミダス」「朝日けんさくくん」といったDBの紹介のほか、新聞を比較読みする授

業を司書教諭がおこなっている。

高1の「人間学」では後期に「チーム探究」という課題に取り組む。授業で取り組んできた「障がい」「高齢者」「異文化」というテーマから一つ選び、事例の一つ取り上げて探究するという取り組みで、先に示した【図1】のレベルBの探究に該当する。司書教諭から簡単に使える資料やDB、マッピングと情報カードの紹介をおこない、個別レファレンスで対応している。

高等部では、中等部と違って十分な時間が取れず、情報リテラシーや著作、参考文献については詳しく教えられていない。高校からの入学生が増えているので、内部進学生との間に著作権や情報リテラシー、参考文献に対する意識の開きができてしまっている。個別レファレンス時に伝えるか、チームにいる内部進学生からの口コミに頼っているのが実情であり、大きな課題だと考えている。

6. 学校図書館の目指すもの

先に述べたように図書館の利用は、進路に向けての学びのみならず、生涯にわたる学びにつながるかと考えている。特に情報を見極める力はアメリカ大統領選やロシアとウクライナの情報戦でもわかるように、非常に重要な能力となっている。情報を扱う図書館としては常にその能力を身につけてほしいと考えている。

「図書館は自立した市民を育てる」、「自立した市民」とは「自ら考え・判断・決定し、行動することができる人間になる」ことであると慶応大学の片山義弘氏の言葉だ(学校図書館問題研究会2008年島根大会講演会にて)。最近、注目されているデジタル・シティズンシップとも通じる。

レポートや論文を書く時には参考文献を必ず書くこと、その書き方は図書館を使った授業がおこなわれる時には必ず伝えている。引用や要約等の細かい指導はできていないが

『道しるべ 論文作成の手引き』の中に例示している。高等部ではそれしかできていないことは課題だとも考えている。著作権に対する知識も欠かせない。特に著作権法第35条において特別に許可されていることであることを都度伝えるようにしている。

これらのことは、学習指導要領がどう変わろうが、教育の担うべき役割であり、情報を扱う学校図書館はそれを支えていかななくてはならない。そして「図書館ってそのために必要だよ」と生徒からも教職員からも思ってもらい、卒業後も、進学先でも、そして生涯にわたって学ぶ意欲を持ち、図書館を使っていて欲しいと願っている。

引用文献

桑田てるみ (2016)『思考を深める探究学習：アクティブ・ラーニングの視点で活用する学校図書館』全国学校図書館協議会 p24

(なるかわ・ひろこ／

玉川聖学院情報センター)

関西学院大学の高大連携

尾木 紹学

1. 関西学院大学の高大連携の歴史

関西学院大学では、同じキャンパスに関西学院高等部が併設されていることから、高大連携を密接に行ってきた歴史があり、その経験を、現在の高大連携事業に活かしている。

平成12年～16年の間に実施された兵庫県教育委員会との包括連携協定に基づく高大連携事業に際しては、高大連携規程を整備し、兵庫県の県立高校生の大学授業の聴講等を可能とした。

その後、文部科学省スーパーグローバルハイスクール事業（SGH）が平成26年度から開始されるにあたり、学長の特命により



関西学院大学

関西学院ホームページより

SGHへの支援を開始し、本格的な高大連携事業を展開することとなった。

令和3年度末までは、SGH事業の後継事業と言える文部科学省のワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業（WWL事業）を中心に、高大連携事業を展開している。

2. SGH事業における高大連携

SGH事業は、高校での教育を通して、将来、国際的に活躍できるグローバルリーダーの育成を目的としている。

SGHに指定された高校は、目指すべきグローバル人物像を設定し、国際化を進める国内外の大学や企業、国際機関などと連携して、グローバルな社会問題やビジネスをテーマに探究を行う。

生徒たちが探究を通じて、社会課題に対する関心や教養、コミュニケーション能力や問題解決力などの国際的素養を身につけることが事業の狙いであり、SGH各校は、今回の新学習指導要領を先取りした形で、探究やアクティブラーニングに取り組んだ。

関西学院大学がSGHとの連携に向けて最初に行ったことは、「平成24年度文部科学省グローバル人材育成推進事業」に採択された国際化を先導する大学として、SGH事業に申請を検討している高校に対して支援を行うことを事業説明会において周知することであった。

続いて、教育委員会や高校を訪問して、具体的な支援の内容を提示し、これを各校がSGHプログラムに盛り込んで申請を行った。

その中でも大阪府の「グローバルリーダーズハイスクール」に指定されている高校がSGHに指定されたことが契機となって、兵庫県教育委員会に続いて、大阪府教育委員会と高大連携に関わる包括連携協定を締結することとなった。

最終的に、関西学院大学が支援する高校は、近畿地区にとどまらず全国に及んだ。

3. 高大連携の具体的な内容

関西学院大学がSGHに行った支援は以下のとおりである。

- 教員派遣（高校内授業・講演会）
- 大学授業聴講・科目等履修
- 大学生・留学生とのワークショップ
- 関西学院世界市民明石塾
- ハーバード大学×関西学院大学 交流事業
- 高大接続フォーラム（教員対象）
- サイテックリサーチフォーラム
- SGH甲子園（成果発表会）

※後にWWL・SGH×探究甲子園

これらの内容をいくつか紹介したい。

関西学院大学は平成26年度に「文部科学省スーパーグローバル大学（SGU）」に採択された。SGU事業の一環としてスタートした「国連・外交プログラム」では、高大連携事業として、元国際連合事務次長、元国際連合事務総長特別代表の明石康氏を塾長として、「関西学院世界市民明石塾」を開講している。

関西学院大学のミッション「Mastery for

Service”を体現する世界市民の育成」の下、将来グローバルリーダーとなることを目指す高校生が明石塾に参加することで、国際的視野と主体的な課題解決力、コミュニケーション力等を涵養することを目的とした。

人材の派遣も積極的に行った。各校で実施される探究のテーマに合わせて、大学教員や大学院生の派遣を行い、高校生に対して授業を通じて知識を付与し、課題研究の方法や論文の書き方について指導を行った。そして、外国人留学生を英語によるディスカッションやディベートなどに派遣し、英語による対話的な学びや、外国語運用能力の向上のための支援も行った。

さらに、国連ボランティア計画やJICA等と連携した国際社会貢献活動に参加しSDGsの最前線で活動した学生を高校に派遣した。学生の国際社会貢献活動における、生々しい体験に生徒が触れることで、高校で行われるSDGsに関する探究への興味、関心や意欲を高めることを目的とした。

このほか、関西学院大学の授業履修が可能となるよう高大連携規程を拡充し、単位取得が可能となるアドバンストプレースメントを開始するなど、高大連携において嚆矢となる取り組みを次々と実施した。

事業のうち最も大規模なものはSGH甲子



「明石塾修了式」
関西学院ホームページより



「国連ユースボランティア」
関西学院ホームページより



【SGH 甲子園 2019】

関西学院ホームページより

ダイジェスト映像：

<https://www.youtube.com/watch?v=ZNdwM59-0Xs> (参照 2022-05-09)

園である。全国のSGHを対象として、SGHの生徒の探究の成果をプレゼンテーション、ポスター発表、グループディスカッションを行い、これを評価し、生徒の今後の学びに資するためのコンテストを開催した。

平成29年度からは、文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業（主体性分野）の調査・研究の取り組みの一環としてこれを実施し、過去最多の109校151チームが参加。関係者を含めて約2,400名が集まった。

SGH甲子園の開催目的は、参加した高校生がお互いに、他校の生徒の探究の成果を見聞きすることで刺激を受け、自己の探究の糧とすることであり、高校教員にとっては、生徒の研究発表を通して指導内容を検証し、研究開発のまとめとし、次年度の研究開発に向けた評価の場として活用することにあった。

4. 次代の教育改革とWWL

新たな高校学習指導要領が実施されたばかりだが、次代の教育改革に向けて、「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」の検討が内閣府で行われている。

大学の高大接続業務に関わった者から見て、次代の教育改革において最も注目すべきキーワードは「文理分断からの脱却」ではないだろうか。「AIやIoTなどの急速な技術の進展により社会が激しく変化し、多様な課題が



Society 5.0に向けた人材育成 ～社会が変わる、学びが変わる～

文部科学省ホームページより

https://www.mext.go.jp/a_menu/society/index.htm (参照 2022-05-09)

生じている今日、文系・理系といった枠にとらわれず、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結び付けていく資質・能力の育成¹⁾（文部科学省ホームページより引用）のためにSTEAM教育がさらに推進され、ギガスクール構想による一人一台端末の環境で、インターネットに接続された情報機器を駆使して個別最適化された学びを実現する取り組みも行われるだろう。

このように次代の教育改革が検討されているなか、「Society 5.0に向けた人材育成」に向けてWWL事業が開始され、次代の教育改革を先取りした取り組みが行われている。

WWLとは「将来、世界で活躍できるイノベティブなグローバル人材を育成するため、これまでのSGH事業の取組の実績等、グローバル人材育成に向けた教育資源を活用し、高校等の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備をしながら、高校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し、テーマを通じた高校生国際会議の開催等、高校生へ高度な学びを提供する仕組みアドバンスラーニングネットワーク（ALネットワーク）の形成を目指す取組²⁾」である。（文部科学省ホーム



WWL・SGHx探究甲子園
関西学院ホームページより



関西学院大学AI活用人材育成プログラム
関西学院ホームページより

ページより引用)

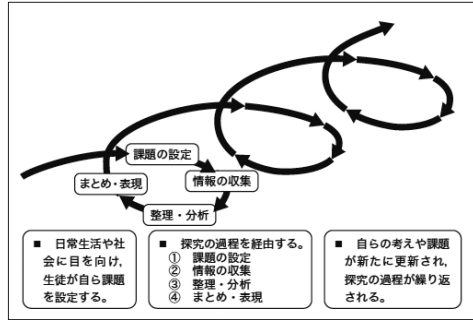
このWWL事業に関西学院高等部が拠点校として選ばれ、20校を超える国内外の高校とALネットワークを形成し、関西学院大学が支援を行っている。

関西学院がWWL事業で設定したテーマは“AI活用 for SDGs”であり、各校の探究において、生徒がAIを活用することで課題解決を提案することを狙いとした。そのために、関西学院大学の学生を対象として開講しているAI活用人材育成プログラムを高校生向けに編集し、Ed-Tech(リクルート社のスタディサプリ)を介してストリーミングによるプログラムを提供することによって、全国の高校の生徒が、AI活用に関する学びを、いつでも、どこでも受講できるようにした。まさに次代の教育改革を先取りした取り組みと言えるものだと考えている。

5. むすび

今回の高校学習指導要領の改訂において

探究における生徒の学習の姿



文部科学省ホームページより

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2011/02/17/1300464_3.pdf (参照 2022-05-09)

は、「主体的、対話的で深い学び」として、アクティブラーニングの視点を学びの手法に取り入れるとともに、いわゆる探究(探求ではない)が、各科目に要素として取り入れられたほか、総合的学習の時間に代わり、総合的探究の時間が組み入れられることとなった。

その「探究」をSGH・SSHやWWL校が先導的に実施する中で、関西学院大学の特色ともいえる「グローバル・国連」、「SDGs」、「AI活用人材育成」等に関わる教育資源を活用し、高校の探究をはじめとする教育改革に貢献することが関西学院大学の高大連携の意義であった。

では、大学図書館がこの高校教育改革に貢献することができるのであれば、どのようなものがあるだろうか。

「主体的、対話的で深い学び」の対話的学びにおいては、「先人の考えから対話的に学ぶ」ということが示されている。生徒自身が先人の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自らの考えを広げ深めるために文献を活用するにあたっては、図書館(室)がその役割を担うことになる。

また、大学教育の研究活動と同様に、情報検索、情報収集は、高校での探究においても不可欠の要素である。課題を設定した後、課

題に関連する知識を吸収するためには、課題に関連する図書や、先行研究の論文データベースからの情報収集が不可欠となる。

また、課題に関連する図書は何かがあるか？どのような資料をあたればよいか？その資料はどのように探せばよいか？情報検索のリテラシーは、まさに図書館のレファレンス・ライブラリアンの支援する領域であろう。

さらにビブリオバトルやポップコンテストなども、新たな学習指導要領下での「言語活動」やアクティブラーニングの一環として教育的な効果も期待できるだろう。

近年、ラーニングコモンズの導入によって教育学習支援者としての専門機能を求められる大学図書館職員であるが、高大連携においても、果たすことのできる役割が十分にあるのではないかと考えている。

(おぎ・じょうがく／関西学院大学図書館)

参考URL

1) 文部科学省ホームページ「STEAM教育等の各教科等横断的な学習の推進」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newscs/mext_01592.html (参照 2022-05-09)

2) ワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業ホームページ「WWLとは--事業概要」

<https://b-wwl.jp/about/> (参照 2022-05-09)

大学図書館の可能性を切り拓く —高大接続の学びを支援する—

林 恵理

1. はじめに

大正大学は、東京都豊島区にある学生数4,808名(2021年5月1日現在)の大学です。学部は社会共生学部、地域創生学部、表現学部、心理社会学部、文学部、仏教学部の6学



図1：大正大学新8号館

部と大学院3研究科から構成されています。2026年には創立100周年を迎えます。

私が所属している附属図書館は、2020年に新しい建物(=新8号館)が完成しました。「イノベーション」と「創発」を基本コンセプトに設計された本建物は、図書館機能に加え、1階には国内最大規模のラーニングコモンズを置くなど、総合学修支援施設としての機能も備わっています。私たち図書館職員は、新8号館を「学生が学科や学年を超え、教職員や地域の人びとも集い、学び合い、語り合うサードプレイス」と位置づけています。高校を卒業した一人ひとりの学生が、大学の学びへとスムーズに移り、少しずつ自分自身を成長させていってもらいたいという想いも込められた建物です。

私は同年9月、グランドオープンと同時に前任の入試課より異動となりました。今回は2021年5月に実施した、東京都立赤羽北桜高校との「高大連携の事例」について報告いたします。

2. 実施の背景

高校では、2022年度から新しい学習指導要領に順次移行していきます。その大きな特徴は、国語科や地理歴史科などで探究科目が設置され、探究学習に力を入れる点です。とりわけ「総合的な学習の時間」は、「総合的な探究の時間」に名称が変わり、位置づけが刷新されました。しかし、学校の裁量でカリキュ

ラムを編成する点に変わりはありません。

東京都立赤羽北桜高校は、家庭・福祉の専門高校として2021年4月に開校しました。保育・栄養科、調理科、介護福祉科の3つの科を設置しています。探究活動の充実、地域との連携を積極的におこない、卒業後の進路として、就職だけではなく大学や専門学校等の進学を目指す生徒も支援しています。

大正大学と赤羽北桜高校は、2020年10月30日に「教育・カリキュラム連携に関する協定」を締結しました。この協定は赤羽北桜高校の生徒に対し、大正大学を活用した事業をおこなうことで専門性を高め、大学進学への目的を明確にしてもらうとともに、大学進学後の自己の在り方や生き方に関する意識を高め、大学と都立高校などの教育及び研究の充実、発展を図ることを目的としています。

今回は同校1期生の1年生に対し、「総合的な探究の時間」の一環として探究学習を始めるにあたり、その動機づけとして依頼されたものでした。本学新8号館のオープンが、ちょうどコロナ禍だったこともあり、地域や学生への全面的な開放ができておらず、私どもとしても大変心苦しい時期が続いておりました。今回の依頼を、外部向け（とりわけ高校に対して）のモデルプランとして確立すべく、新たな試みに挑むこととなりました。

3. 準備について

実施するにあたっては、大学の学びへの接続、自校の理解、アカデミックスキルの習得、キャリア教育の4つを柱として支援する、本学の「総合学修支援部」とともに検討し、赤羽北桜高校との窓口となってもらいました。社会的情勢に鑑み、赤羽北桜高校とはメールやオンライン会議などでやり取りを重ねていきました。普段私たちは、学生に対して「図書館利用ガイダンス」をおこなっていますが、高校生を対象に、しかも授業の一環として実施することは、もちろん初めてでした。今回

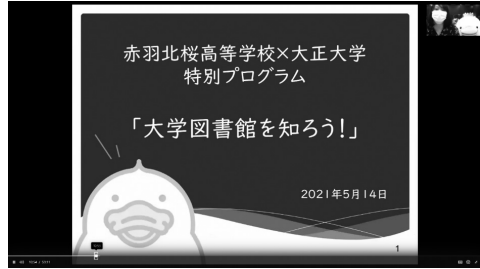


図2：図書館職員講義で使用したスライド①

の講義では「図書館に親しんでほしい、本と出会う楽しさや嬉しさを実感してほしい」という思いを、職員間で常に共有していました。

私は前部署の業務柄、高校生とコミュニケーションを図ることが多かったため、その点は大きな強みとなりました。スライド資料の見せ方、説明方法、生徒に授業に参加してもらう（＝巻き込む）ための動機づけの工夫など、職員自身が楽しみながらコンテンツを検討していきました。

4. 急きょオンラインのみに変更

当初本企画は、2021年5月7日と14日の2回にわけて、生徒が本学に来訪する形での実施を想定しており、私たちも対面を前提とした実施計画を立てておりました。大まかな方向性が定まってきた、ちょうど1か月ほど前でしたが、上記日程が「まん延防止等重点措置」期間と重なってしまうことが判明しました。赤羽北桜高校及び本学の感染予防対策に鑑み、本企画も残念ながら対面での実施は中止と判断し、オンラインで1回限りの実施と決まりました。

オンライン方式もある程度は想定していたものの、いかに画面越しでも伝わるコンテンツとするかが求められました。教職課程で学んだ指導案作成を思い出しながら、簡易的なプログラム実施案（図3参照）を作成し、職員間でさらに検討を重ねました。本稿を執筆するにあたっては、その資料も参考にしています。実施案として見える形に落とし込んだ

結果、何を目的とするかがより明確となりました。そのおかげでオンライン方式となった際も、内容の見直しが比較的容易だった気がします。

赤羽北桜高校との打合せ時に「本講義で特に求める点は何か」とお尋ねしたところ、担任の先生から「大学図書館でできることについて知りたい。とりわけ館内設備、日本十進分類法、所蔵冊数、OPACでの検索方法などを説明してほしい」というリクエストを受けました。いただいたご意見を踏まえ「施設紹介動画」を見せるとともに、「館内設備について」と高校でも求められる「検索方法の紹介」も具体的に説明することにしました。

5. 当日について

当日は赤羽北桜高校の時間割に沿い、5限(13:15～14:05)、6限(14:15～15:05)の50分2コマを使って実施しました。具体的

なスケジュールについては、下表のとおりです。午後開講のため、いかに生徒を飽きさせずに進行するかが大きな鍵となりました。

図書館長による講義は、「本の豊かな世界へ飛び出そうー図書館とメディアにつきあうためのヒントー」というテーマでおこないました。何のために学ぶのか、図書館という空間でできることは何か、写真を示しながら進めました。特に、デジタル・ネイティブである高校生に必要な情報活用の方法について取り挙げました。生徒たちは「図書館へ行ってみよう」、「私の1冊を持とう」、「知識を得るための読書をしよう」といった館長からのメッセージを真剣に聞いており、積極的にメモを取っている様子が画面からも伝わってきました。

続いて、図書館職員による講義では、館長が話した内容も踏まえながら「大学図書館の紹介」と「本の検索方法」を説明しました。「実

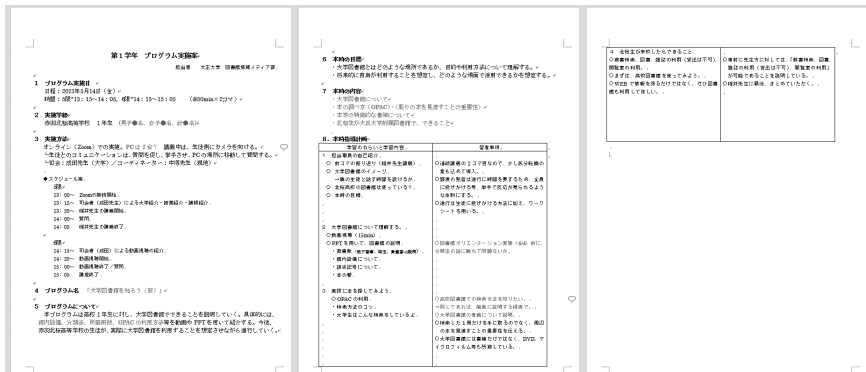


図3：プログラム実施案

実施時間	実施計画内容
13:00～13:15	Zoomの接続開始
13:15～13:20	司会者による大学紹介、授業紹介、講師紹介
13:20～14:05	★図書館長講義
14:05～14:15	休憩
14:15～14:20	司会者による講師紹介
14:20～15:00	★図書館職員講義
15:00～15:05	★質疑応答

表1：当日のタイムスケジュール(★を担当)

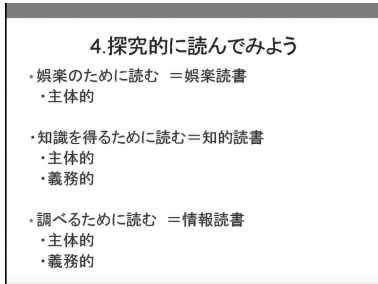


図4：図書館長講義のスライド

際に「北桜生」のみなさんが、大正大学附属図書館に来たらできること」として、より自分事として捉えられるように工夫しました。導入として3つの質問を投げかけ(図5参照)、各自が抱いている「図書館・図書室」のイメージと、動画などでお見せする「新8号館」とを比較してもらいながら、講義を進めていきました。

目玉としたのは、本の検索(OPAC、ブラウジング)を生中継で行ったことでした。学生向けの「図書館利用ガイダンス」では、事前収録した動画を見せる手法が多いのですが、今回はライブで実施することで臨場感を出し、実際に自分が本を探しているようリアルな感覚を持ってもらえるよう工夫しました。

2つの講義のあと、質疑応答の時間を設けました。印象的だったのは「本を読んでいる途中で飽きてしまう時があるが、どうしたらいいか」という質問です。高校生にとっては、本に触れる機会はあるものの、その本を読破しなければならないという固定観念があるのかもしれないと気づかされました。この問いに対し、館長から「勉強のための読書でなければ、必ずしも最後まで読む必要はない。また読みたくなる時が来る。そういう読み方もあると知っていることが大切ではないか」と回答しました。高校生にとって、新しい気づきとなっていたら嬉しく思います。

無事に本企画を終えた後、総合学修支援部と合同で振り返りの場を設けました。通信環

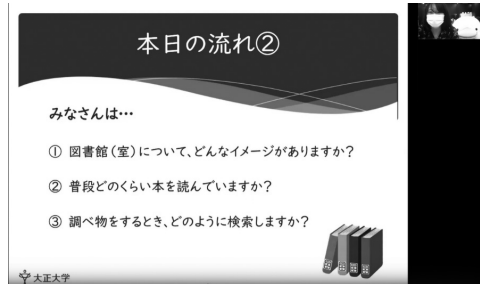


図5：図書館職員講義で使用したスライド②

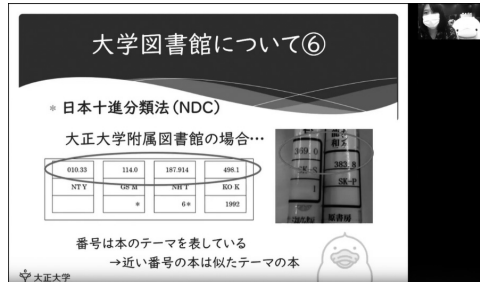


図6：図書館職員講義で使用したスライド③

境や画面の共有設定などの設備課題に加え、図書館が読書をする静かな空間としてではなく、学修と一体化してきている点をもっと丁寧に説明すべきだったといった意見が挙がりました。

6. 今後の展望

ご紹介した本講義は、今後さらに発展できるものと考えています。今回、執筆の機会をいただき改めて感じたのは、大学図書館で実施するという先進性です。手前味噌ではありますが、高校生の参加意欲も非常に高く、充実した内容になったと考えています。加えて、新たな挑戦がこのような形で実を結び、私たち図書館職員も大きな達成感を得ることができました。まだ発展途上ではありますが、大正大学の「高大連携」の1つのプログラムとして確立させ、最終的には大学図書館が各校の要望に合わせて独自の企画を提供するという、いわば新しい形も目指したいと考えております。

本学の実践が、ポスト・コロナ社会を見据えた新たな大学図書館像を切り拓いていくと確信しています。

(はやし・えり／大正大学附属図書館)
libinfo2@mail.tais.ac.jp

参考URL：

連携協定 | 東京都立赤羽北桜高等学校 (参照2022-04-14)

<https://www.metro.ed.jp/akabanehokuo-h/agreement.html>

大正大学と東京都立赤羽北桜高等学校が教育・カリキュラム連携に関する協定を締結(参照2022-04-14)

https://www.tais.ac.jp/guide/latest_news/20201102/68957/

2020年9月「総合学修支援施設」オープン！
【大正大学】(参照2022-04-14)

<https://www.tais.ac.jp/p/dac-institution/>
大正大学8号館 - 公益社団法人日本サインデザイン協会 (SDA) (参照2022-04-14)

<https://www.sign.or.jp/sda-award/%e5%a4%a7%e6%ad%a3%e5%a4%a7%e5%ad%a6%ef%bc%98%e5%8f%b7%e9%a4%a8>

大正大学8号館 | 実績 | 大林組 (参照2022-04-14)

https://www.obayashi.co.jp/works/detail/work_2521.html

「図書館入試」における お茶大図書館の挑戦

餌取 直子

1. はじめに

お茶の水女子大学では、2017年度入試(2016年度実施)から、従来のAO入試を大幅に改革した新AO入試「新フンボルト入試」を始めた。この入試は、第1次選考を兼ねる

プレゼминаール(9月実施)と、第2次選考の「図書館入試」(文系)・「実験室入試」(理系)入試(10月実施)の2段階で構成されている。「入試時に知的ピークを向けてしまう学生ではなく、入学後の学びのなかでその意欲と能力を伸ばし、大学院への進学後あるいは社会に出てからもいっそうの飛躍を見せるような、「伸びしろ」(ポテンシャル)のある学生を選抜しうる入学選抜方法を確立すること、を目標」に計画された(安成2021)。背景として、従来入試ではその生徒が何を学びどのような力を持っているかではなく、暗記等の入試テクニックが重視されがちであることへの危惧があったと聞いている。高校までに蓄積した知識や能力を活かし、新たな学びに繋げることができる学生を選抜するためのこの入試は、高大連携を強く意識したものと見える。

新フンボルト入試制度の理念や詳細は、参考文献リストに掲載している本学ウェブサイトや当時のAO入試室長である安成英樹教授が執筆された文章を参照いただくとして、本稿では、筆者が一図書館職員として担当してきた図書館入試の内容やそこで感じたことをレポートする。

2. 「図書館入試」とは

新フンボルト入試の2次試験として実施される「図書館入試」は、名前の通り図書館内で行う入試である。1次選考を通過した受験生36名は、図書館内に設置されたレポート作成会場で、情報基盤センターが整備した学内LANに接続したノートPCを使い、図書館内の資料はもちろん大学で契約しているデータベースやウェブ上の情報も使用して試験課題(レポート)に取り組む。レポートは手書きでも良い。試験時間は6時間に及ぶ。受験生は館外には出られないが、トイレや図書の貸出、休憩のために自由に館内を立ち歩くことができ、昼食は12～13時の好きな時

間に所定の場所で取る。不正防止策として、スマホや携帯電話は他の荷物とともに会場外で預かるほか、インターネットで外部とのやりとりをしないよう注意したうえで各PCのアクセスログを保存している。

2日目には教室でグループ討議と個別面談を行い、1日目に作成したレポートと2日目の討議や面談の結果により合否が決定する。

3. 図書館職員の役割

図書館職員は図書館入試の1日目のみに関わっている。AO入試室・入試課との数回の打ち合わせに参加し、主に、試験会場の設営、図書館利用方法やレポート作成の基本についての30分程度のレクチャー、レポート作成会場近くに設置する仮設カウンターでの図書の貸出対応、館内案内兼監視役の学生アルバイトの指導を担当している。受験生が取り組む課題の内容や評価には一切関わっていない。

2014年に初めて図書館にこの入試制度の話が持ち込まれたとき、入試業務に図書館が大きく関わることへの不安や重責を感じたことを覚えている。不安の中には、課題のテーマによっては資料が少なく受験生による本の取り合いが生じてしまうのではないかという蔵書数に対するものと、はたして図書館職員がこのような大学の大きなイベントに対応できるかという職員に対するものがあった。

蔵書数への不安については、受験生への当日の説明で「この入試の目的は図書館の本を探すことではなく、与えられたテーマについて自分がどう考えるかの戦略を立て、そのうえで必要な情報を探すこと」が含まれていたことや、AO入試室の予算で購入した課題テーマに関する図書を一部の職員にしか分からないような形で受け入れて増強することにより解消することができた。予算の関係でここ数年はAO入試室による図書の増強はなかったが、実際の課題は「動物と人間の関わりについて論じなさい」「言語の持つ力について

自由に論じなさい」等、多方面からアプローチできるものであるため、同じ図書に利用が集中することは少ない。

職員が対応できるかという不安については、レクチャー内容に関するものが大きかった。従来から学部1年生向けの必修授業内で「情報探索基礎講習」、授業やゼミでの依頼により「図書館オーダーメイド講習会」を実施しており、学内者向けのレクチャーの経験はあったが、適宜担当教員からの指導を受けることができる授業内での講習会とは異なり、図書館員のレクチャーを元に受験生が情報源を集めて書いたレポートが受験の合否に関わってくるとなるとこちらの心構えも大きく異なる。初めてお茶大図書館を使う受験生が理解できるような内容に変更する必要があるうえ、万が一こちらの説明が足りずに十分に資料を収集できなかった場合は合否にも影響してしまうかもしれないという責任を感じた。最終的には、安成教授の「合否に関わらず、受験生にはこの入試で何かお土産を持って帰ってほしい」という強い思いを受け、お茶大図書館の使い方にとどまらず、信頼できる情報源の調べ方やそれを使うことの重要性を意識させるようなものにし、安成教授による事前確認を経てレクチャー内容を確定した。また、当日の職員の動きについては、本番入試に先立って実施した有志の学部1年生を対象とした図書館入試のシミュレーションによってある程度確認することができた。

4. 受験生への補足説明

本学には附属図書館以外にも多数の研究室図書室があるが、試験当日に利用できるのは附属図書館内にある資料のみである。また、本の配架場所についての質問には回答するが、「***についての本はどうやって調べますか」「***についての統計資料はどこに載っていますか」等のレファレンス系の質問については、入試課題解決の手助けとなっ

大学の図書館 第41巻第5号 (No.582) 2022年5月25日 (毎月25日発行) ISSN: 0286-6854
編集・発行: 大学図書館研究会 年間予約購読料: 送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付

Fax: (044) 989-2250 E-mail: shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00140-6-482205 大学図書館研究会出版部

三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座: 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付

E-mail: dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

てしまう恐れがあるため、調べ方はレクチャー配布資料を見て自分で確認するよう回答している。試験中はやむを得ない対応であるが、受験生が通常時でもこのような制限があると思いついてしまうと今後の学習行動にも影響するため、1日目の最後の事務連絡の時間内に補足説明時間をもらい、当日は制限をしていた通常の図書館サービスについて以下のように説明している。

- ・研究室図書室の資料も利用できるほか、手続きをとれば他大学の資料も利用できること
- ・図書館内にはグループ学習ができるスペースがあり、複数人で話し合いながら課題に取り組んでも良いこと
- ・何をどうやって探せばよいか分からないときには図書館職員に質問してほしいこと
- ・学習に行き詰ったときには、図書館にいる大学院生の学習支援サポーターのLALA (Library Academic Learning Adviser) に相談してほしいこと

5. さいごに

図書館の改修工事を挟みながらも、関係メンバーで一丸となって取り組むことで6度の図書館入試を大過なく実施することができた。筆者は3年目からレクチャーを担当することになり、個人的にも大きな挑戦であったが、入試担当の教員やAO入試室や入試課と協力して実施する中でこの入試にかける関係教員の強い思いを感じ、また、本学に入学す

るためにこの長時間に渡る入試に果敢に取り組む受験生の姿を目の当たりにし、いっそう大学への愛着が湧くようになった。また、この入試を通じて、大学図書館は、それぞれの学生が高校で得てきた知識を大学での学びに繋げる場でもあるという存在意義に改めて気付くことができた。

筆者は実施当初から図書館入試に関わっているが、多少慣れたとはいえ、入試という受験生にとって大きな分岐点ともいえるイベントに携わることへの緊張感を拭きながら、受験生が安心してレポート作成に取り組めるような環境を作っていきたい。また、受験生がどのような進路に進んだとしても、今後の生活の中で図書館を大いに活用して学習・研究に取り組んで欲しいと願っている。

参考文献

お茶の水女子大学. “総合型選抜 (新フンボルト入試)”. <https://www.ao.ocha.ac.jp/ao/index.html>, (参照2022-04-17)

安成英樹. “入試を創るということーお茶の水女子大学新フンボルト入試の挑戦”. 大学入試を設計する. 宮本友弘, 久保沙織編. 金子書房, 2021, p.99-119, (東北大学大学入試研究シリーズ).

(えとり・なおこ/

お茶の水女子大学図書・情報課)